ふわごころ

anon

ふわごころ

ふわり、ふわふわ。

ふわごころ。

つれづれなるまま、ゆったりと。

ながれながれて、つられゆく。

たゆたうこころが、唄うことばを。

目をとじそっときいてみよ？

なにかにきづいて、目にうつるるは。

ほら、またふわふわたゆたうこころ。

ふわふわながるる、ふわごころ。

どこへなにへとつながるこころ？

時

過去
それは後ろにある時
涙が溢れる時
離れてくれない時
振り返ればいつもある
戻れない時

未来
それは前にある時
誰かと出会う時
壁にぶつかる時
顔を上げればいつもある
頼れない時

今
それは繋いでいる時
感じられる時
何か出来る時
急いでていつも見えない
掴めない時

過去と未来を形にするのは今？

いや違う

『今をかける私』

遠い旅路

君への思いを
この雨に隠そう

いつかこの思いが
戻ってきたとしても

今度は笑って受け止められるように

今は隠そう

この世界で君に出会えた事は
奇跡だから

大切な思いだから

だから

今は隠させて

荷物

荷物持って

ちょいとそこまで

そこまで行って一休み

間に何かが荷物に入る

荷物持って

ちょいとそこまで

モノクロ荷物に何かが入る

休むたんびに荷物は染まる

荷物持って

ちょいとそこまで

歩く度にこぼれる何か

気付かず遠く何メートル

荷物持って

ちょいとそこまで

それでも荷物の隙間は埋まる

気付かず何かに染まってく

荷物持って

ちょいとそこまで

ちょいとの距離に

荷物はいっぱい

染まった荷物はついてくる

大事な何かはついてくる

落とし穴

ぐらりと揺れて
足元歪む

青い空が狭苦しい
空気の薄い境へ誘う

とっさに掴んだツタの葉は
手からするりと抜け落ちて

底の見えない黒い箱へ
ただ暗闇に 足音響く

身の型浮かべ我に帰るは

時既に遅し

ただ一握りのツタの葉を

求めさまよう定めかな

輪廻

世界の時が廻る

過去を振り切るように
時に無慈悲に
音をたて

廻る

同じ場所をなぞるように
時に無情な
羅針盤を

廻る

同じ場所をなぞり
違う未来と過去を刻む

人間に生み堕とされた
人間の為の“時”を

祈りと共に
“命”尽きるまで

大人

大人とは

人を知り

絶望し

光を見据え

導かれ

宙を舞い

思い込み

旗を立て

ふりかざし

縋り付き

愛を見て

何かを求めて

生きる

そう

皆知っている

子供は大人を見て

気付くのだ

自分は大人になるのだと

大人は世界を見て

気付くのだ

自分はまだ子供なのだと

シコウ

喜怒哀楽

それだけじゃ表せない複雑な感情達

そこに自分の意思を少々

記憶と一緒に
よーく炒める

失敗して真っ黒い塊が出来ても

それでも材料は
まだまだあるから

嘘という名の
スパイス散らして

不安という名の
フライパンの上

何度でも

何度でも

強きモノ

初めてこの世に
産声あげたあんたは

何を感じただろう

きっと
何も考えてなくて

まさに
純真無垢

脳のシワがひとつもない

真っ白い世界

きっと
眼を開けたとき

同時に
ひとつのシワが脳に刻まれただろう

そうして

みんな生まれたの

人間って
にんげんって…

激流の世の中で
ここにいるあんたは

時代で見ると
一瞬の通り風であり

己で見ると
一歩を踏み出さない能無し

何かを守るために
刃を持つ矛盾

その矛と盾を
持っているか
知っているか

それを知って
なんになる

あぁ
人間って
にんげんって…

顔さえ知らない無数の誰かが
踏み固めた泥土を

黒く汚れながら
歩くあんたは

何かを憎み牙を剥く
時々己の素肌にかぶりつく狂気

善も悪も
結局誰も知ろうとしない
そんな世に

何を叫んで
すがりつくのか

あぁ
人間って
にんげんって…

一日だけ生きるなら
いっそ一千年生きるなら

あんたはきっと

今よりもっとキレイだろう

でもその時
あんたは人と呼ばれない

化け物と呼ばれるんだろう
世の中の悪魔で神だろう

人間の定義
名付けて『当たり前』
踏み外せば…

人間って
にんげんって…

人間を
罪モノだと言ったのは誰か

人間を
否定するのは誰か

人間を勝手にナメるな
人間を勝手に決めるな

人間はあんただ

にんげん…

そして
己が初めて光を感じた眼から

透明な真実を
一粒

それでも
生きる

人間って…
人間は…

人間は

強すぎる生き物だ

イヤホンとガール

一日を
始めようじゃないか

そうやって
ガールはイヤホンを

色々なメロディーが
耳元をすり抜けて

様々な音が
様々な言葉をのせて
響いてくる

イヤホンの向こう側
知らない人の歌声が

毎日を
鮮やかに染めていく

それに散々
一喜一憂しながら
それを楽しく思う

イヤホンの向こうは
どういう世界が
広がっているんだろう

それを想像して
それを楽しく思う

二つの世界は

細くて脆い

一つのコードで結ばれる

不思議な感覚にのまれて

また
二つの世界の狭間に

陶酔していく

イヤホンとガール

ガールとイヤホン

羽根のある日常

例えば
私の大好きな料理を
食べたとする

胸がほっこりして

天にものぼる気持ちがして

さらに
お腹が空いていたりすると

羽が生えて
飛べる気がしたりする

例えば
私の大好きな曲を
聴いたとする

胸をわしずかみされて

頭の奥に何かが染み渡って

さらに
イヤホンで聴いたとしたら

唸るバスのリズムが
身体を駆け巡って

羽を広げて
空を見上げたくなる

なんてことない

些細な日常

大好きな料理を

大好きなあなたと
はんぶんこして

大好きな曲を

大好きなあなたと
聴いたりして

一人と二人

たったそれだけの
変化

ズガンとくる
衝動は私の中を
駆け巡って

空へと羽ばたいていった

そんな

平凡な日常

なんてことない

平凡な私の

ベストな日常

冷やしうた

ひやっと冷たい氷を削って
シロップかけてかき氷

プールや海の水で遊んで
ビー玉揺らしてラムネをごくり

グレープフルーツ、オレンジ、レモン
柑橘仲間のゼリーをどうぞ

夏にはみんなが好きなもの
透明で綺麗な風物詩

一度、夏のご褒美食べたら
人の心も透き通る

綺麗な心になっていく

そうだったなら
暑いの少しは耐えるのに
食べ過ぎ腹痛耐えるのに

ならば、せめて。

誰もが灰色ならば
限りなく白に近い 灰色でありたい。

誰もが黒に染まるなら
限りなく黒に近い 灰色でありたい。

誰もが白でないなら

せめて